
勇者ROLLINGざワールド

三本指

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者ROLLINGざワールド

【Nコード】

N3370W

【作者名】

三本指

【あらすじ】

このお話の主演ユラ・T・コウメイは、いつ見ても眠そうにすら見える力の入ってない目と、テキトウに思い付いたような事ばかり言っただけでその場をしのいでいる口が特徴のものぐさなお姉さんである。

そんな彼女はこの度、女王様からとても面倒くさそうなお仕事をめでたく押し付けられました。

凄く危ない禁呪を狙う不届き者が現れたらしいので、よその国まで赴き調査（という名の討伐）をしてきて勇者様と。

凄くイヤイヤですが女王様の頼み事を聞かないわけにもいかないの
で解決に向けて相棒の魔女と動き始めます。

襲いかかるのは剣と魔法に魔物の正しいファンタジー要素だけとは
限らない。

銃にトラックにミサイル、果ては古代文明の遺産まで？

なんでもありの世界バーリ・トードを、マフィアも両手を上げて道
を開ける勇者が半ば諦めながらも愚痴と罵声をこぼして延々と走り
回るのがこのお話。

クールでスタイリッシュな時もある????

とある勇者の日常風景。とつほんせいそつ はじまりはじまり。

「とある女王陛下と勇者閣下の会談」一部始終（前書き）

終わる目途の立たない新連載が溜まっていくよん（泣笑）

「とある女王陛下と勇者閣下の会談」一部始終

「おお勇者よ、死んでしまうとは情けない!!」

大変に気合いの入った金髪の女性の声が大理石の敷き詰められた広い部屋に響き渡る。

「……はあ？」

とは、今しがた両開きの豪華な扉を開けて部屋に入ろうとしているもう一人の女性の疑問の声。

知的な印象を際立たせている眼鏡の奥にあるその眠たげにも見える視線は、部屋の中央に置かれた玉座へと向かっていた。

そこに座っているのはパンツルックのスーツに身を包んだ声の主。

こちららも美女だ。纏め上げた絹のような金髪が目眩しい。

「はあじゃないわ！私はあなたが無事に帰ることを真心をこめて祈っていたのにこの結果。お姉さんはとても悲しい！」

「はあ。」

その胸中に浮かんだのは困惑だろうかそれとも呆れか？

ただの一步を踏み出して部屋に入ろうとすらもせず、もう一人の、こちらは腰まである艶やかな黒髪の女性は扉を開けたままの姿勢で金髪の女性の叱責を聞きそう返した。

黒髪の女性はスーツの女性に比べるとラフな格好で、ノースリーブのシャツの上に白いジャケットを羽織り、ぴつたりとタイトなジーンズを身に着けていた。細身で長身な彼女にはよく似合っている。そして彼女は何かを思案するように視線を落とし、静かに溜息をつく。

「どうやら部屋を間違えたようなので失礼します。」

と、思ったら次の瞬間には一步身を引いて扉を閉めようとしていた。「いや、ちょ、ちよっと！どこへいくのよ！間違いない貴方の目的地はこの部屋よ？」

黒髪の女性の美しい顔が扉の向こうへ消える前に慌てて玉座の女性が引きとめる。一応それで扉が閉まる動きは止まったが、返ってきた言葉はとても冷たい。

「いえ、多分お互いに誤解があっただけで私がここに呼び出された事は間違いだったのではないかと。陛下が呼び出すべきは主治医とか近しい親族とかそのあたりの方々でしょう。無事でなかったのは私ではなく陛下の尊い頭脳ですから。聡明な主を失ったこの国は悲しみに暮れるでしょうが、優秀な臣下の方々はきつとこの悲劇も乗り越えてくれるでしょう。それでは私は忙しいのでこれで。」

「いやいやいや、勝手に人を再起不能にしたあげくそれを乗り越えて立ち直った未来までシミュレートしないで！？それにあなた基本的に予定を詰め込んだりしない人間でしょう？」

金髪の女性は玉座から軽く腰を浮かし、その口から悲鳴に近い声があがった。

「いや、もう帰って世知辛い浮世のことを忘れて寝たいんで。夢の世界で妖精達とたわむれたいんで。」

「帰ってきて！？貴女世界の平和を背負って立つ尊い“勇者”なんだから自覚を持ってッ！？」

「私はどちらかというと貴女に国家元首としての自覚を持って欲しいですわ。ていうか私だけじゃなくてみんな思っていますわ。」

「……うつ……！おたがいさまだとは思うけど、胸に突き刺さる一言ね……！善処はしましょう。まあ治りはしないでしょうけど？」

大変苦い顔はしたものの、金髪の女性はとりあえず腰を落ち着ける。黒髪の女性も再び扉を開け広間へと入ってきた。

「それにしてもその他人行儀な口調をやめにしてよ。友達でしょう？」

「誰と誰が？」

黒髪の女性の素朴すぎて胃が痛くなりそうな質問に金髪の女性が眉と口許の筋肉をぴくりと動かししたが、気を取り直して大人の反応をすることに決めたらしく笑顔を作った。

「私と貴女よ。長い付き合いでしょ。」

「死にたい。」

「なぜゆえだアッ!？」

この一言には女王陛下もレディではいらなかったようだ。

「私があなたに何をしたつてのよ! どうして友人関係を確認しただけで相手に死なれないといけないわけ!? 泣くわよっ!？」

「まあまあ落ち着きなさいクイーン。どんなに貴い身分でも人の生だからそういうこともあるわ?」

「私も世間知らずなことは自覚しているけど、“無い”と思うわ、普通。」

「あら、意外と世間つてものがよくわかってるじゃない? 立派よビツグマザー。」

「……私って、時々どうしてあなたを勇者として認めているのか深く考えたくなるときがあるわ。」

金髪の女性、つまりはなんと女王陛下であるらしい彼女は、“勇者”であるらしい黒髪の女性の自由闊達な言動に頭を抱えている。比喩ではなく実際に。

「良い傾向だとおもうわ。これを機に給料泥棒や名前だけの存在についてもっと考えてみるのはいかがかしら。」

「貴女に言われるまでもなく、王様の仕事の半分はそこにあるんじゃないかと思うぐらい頭を悩まされているわよ。どうして能無しに分類される輩ほど、楽をして生活の糧を得ようとするのかしらね?」

「無能とは往々にして怠惰からくるものだからよ。付け足すなら、愚者は悪事こそ本当に知恵が必要ということも知らないから。『無知とは罪』。よく言ったものね? まあ才能だけで全ての怠惰を補う人間もいるけど? 私とか私とか。」

顔色一つ変えずに辛辣かつ不遜なコメントを述べながら、勇者殿は女王の玉座の前まで足を進めていた。

同時に素早く数名の女王の侍女が動きだす。その様に視線を移した

黒髪の女性の元へ駆け寄り、傍らにテーブルをおく。第二陣が椅子を二つ用意したところで、女王が玉座から下りてきた。

「世界中を駆けずり回って人の理の範疇を超えた化け物を討ち滅ぼして回る存在が、果たして怠惰なのかしらね？……おもてなしの準備が整いましたわ。お茶に同席してもらえるかしら？勇者ユラ・Ｔ・コウメイ閣下。」

「私は閣下と呼称されるような地位には居りませんが。しかしお茶のお誘いにはこうお答えしましょう？“喜んで”。」

“勇者”は胸に手を当て、女王に向けて跪いた。

「ふふ、楽しいお茶になるといいわ。」

己の芝居がかった言葉にさらに芝居がかった態度を返した彼女に向けて女王がほほ笑む。先ほどの奇行が嘘にしか見えないほど、その笑みは気品に溢れている。堂々としたその笑みを浮かべたまま、女王は威風すら感じさせる所作で侍女が引いた椅子に腰かけた。

対して勇者ユラはそばの侍女を手で制し、己で椅子を引いて椅子に腰を下ろす。

「仕事なんだから彼女のやりたいようにさせてあげればいいのに。」

「ひとの力ネで偉そうにするのは趣味じゃないの。」

「あら、意外と庶民的なのね。」

「庶民的じゃないと旅なんてやってられないわよ。」

女王がテーブルの上で組んだ手の前にティカップが置かれ、杯に満たされた琥珀色の液体から芳醇な香りが立ち上る。

「どうぞ。お口に合えばいいのだけれど。」

「では遠慮なく。」

顔の前で少しだけ匂いを待った後、カップを口に含む。

「どう？」

「毒ね。」

短い勇者の言葉に侍女の動きがぴたりと止まる。覚えのないことに彼女の顔は強張った。

「この味は私から“庶民”を奪うわ。」

続く言葉の意味に一瞬悩んだ彼女だったが、それが贅辞だと気付いたらしくほっと胸を撫で下ろした。

「ひねくれものめ。もう少し素直にほめ言葉を口にできないのかしら。」

「ギャップがある方が萌えるでしょう?」

軽くユラを睨む女王の言葉にも、顔色一つ変えず紅茶を飲みながらしれっと返すこの勇者はなんというかまさに「大物」らしい。

「あんたにそんなもの求めている奴なんかいやしいと思うわ。」

「あんたも似たようなもんでしょうが。」

お茶菓子も用意され、ここから一時間ほど本当にとりよめのない世間話が続くことになる。

——そして一時間後、彼女は気付いた。

「ちよつと待て。よく考えたらあんた何のために私を呼び出したわけ?」

「え?世間話をするためよ?」

王様の極上のほほ笑みに勇者はとびきりのしかめ面を返すことになる。

「……おい、マジか?」

「さあ、どっちだと思っ?」

にこにこと楽しそうな王様の姿はひどくユラの癪に障るらしい。

「私を本気で帰したくないならそろそろ本題に入ったほうがいいと忠告しておくわ。」

眉間に寄った皺をほぐしている様子のユラの一言。

「あつら、つまらないわ。貴方みたいなからこそこんな時間を大切にすべきなのに。」

「あんたとの時間は一時間あれば十分堪能した気になれるのよ。ごたくはいいからさっさとしてくれ。あるんでしょ?本題。」

「しょうがないわねえ。」

肩をすくめながらも、どうやら本題というものに触れるつもりには

なつたらしい。

「ラストワード」って知ってるかしら——?」

少し妖しさの漂う、意地悪な問いかけをするときのような顔で王様はその単語のことを尋ねた。

そんな問いかけに、ほんの少しだけ間をおいてユラは口を開く。

「……あらあら最後通告なんて物騒ね。私は一応借金は無いわ。今は。」

「別にそんな意味じゃないし、そこから借金が気になりだすとか少し屑人間がすぎるわ。借金がないのが不思議なぐらいね。まああなたからお金を取り立てられる企業なんてそうそう無いでしょうし?」
今度は王様が嘆息する番だった。

「余所はとやかく言わないから、うちのシマを荒らすのだけは勘弁ね。……まあ、あなたの能力から言って大した借金なんて額がそうはないのも事実でしょうけど」

「買いかぶりは良くないわ。貸ししづりも良くないけれど。」

「……あなたとの契約ほんとに見直そうかしら」

ユラが喋るほど王様の顔に疲労が浮かぶようだ。

「それも悪い考えじゃないわね。色んな人が楽ちんになるわ。主に私と私を探すあんたの部下が。」

「冗談よ。……話を戻すわ」

「残念ね。バカンスの計画まで立て始めていたのに」

「頭の中から生活まで、余さずバカンスの人間がよく言うわ。ていうかさつきまで忙しいって言ってなかった?……話を戻すわ。よろしくて?」

「よろしくで」

手をひらひらさせて先を促すユラ。主に人生にやる気が感じられない。

「ラストワードというのは、禁呪の最高峰に位置する魔法よ。むかし昔に封印された、ね。……ていうか、あんたなら絶対に、耳にし

たことくらいはあるでしょう?」

ユラに咎めるような目がむけられる。

「まあ聞いた事はあるんじゃない? 下らない事は気にしないしすぐ忘れる質なの」

だが対してユラはこのとおり。しれつととぼけた反応をする。

王様もどこか、あきれながらも同感というか羨ましいというか、とそんな表情を浮かべた。

「……ま、そこにはシンパシーを感じるかしらね。でも世の中下らない人間ほど下らない事が気になってしょうがないみたいよ。こっちは残念でしょうがないのだけれど。」

王様はわざとらしいともとれる仕草で溜息をついた。

「世の常ね。仕様がないわ」

ユラはゆつたりと、おかわりを持ってこさせたお茶をすすする。

まるで他人事だ。

「ええそうでしょうとも。けれどしょうがないで済まない事態が下手をすると起きそうだからあんたに話をしているの」

「しょうがないわね。聞いてあげるわ」

「それ、いい加減しつこいと思うわ……」

未だ余裕の塊のユラと対象的に、げんなりとした王様が警告を告げる。

「続けるわ。ラストワードを作ったのは古の大魔導師レッドアイ。

と言っても原型……というか基盤というか、そこは自然と悠久の時間の産物とでもいったところなのだけど……」

考えるように眉を寄せる王様と、退屈そうにカップで揺れる水面を見つめるユラ。

一応聞いてはいるようだ。

「もともと在った強い魔力の流れを利用して収束・調整して構築した魔法……だったかしら。そういえば。」

「思い出して来たようね。助かるわ」

未知の大魔法に思考を巡らせるように虚ろになったユラの視線に、

王様が微笑を浮かべる。

「補足するなら、いわゆる竜脈などと呼ばれる、地脈を流れる大地の気の流れが集中する地や、何らかの事情で精霊の活動が極端に活発になった地など、溢れる程の魔力が眠るような地、大抵は聖域として祀られるような場所の魔力を集めて蓄積し、力の使い方を調整して巨大な魔法にしたものがラストワード」

「自然の力を利用したその威力はまさに自然災害に匹敵する、か…昔の人も夢のあるものを作るわー。もちろん皮肉だけど」

片頬を引っ張り喋り辛そうに喋るユラ。まったく厄介なものを、といったところだろう。

「金と力にしか興味ないような可哀想な輩達には刺激的すぎる代物だから、ただの伝説ということにして、ほんの一握りの人材が半信半疑で知ってる程度に管理していたのだけれど…。何故か最近小悪党にまで噂がながれてるらしいのよね」

「私が知ってるぐらいだから最初から情報操作もあてになってないんじゃないの？ 案外頼りにならない王様ねえ？」

「あなたも一握りに入るレベルの人間てことを自覚しなさい。小耳に挟んだ程度と言うのがむしろ間違いよ。それにそんなもの眉つば程度にしか思ってたでしょ？ あなたがそうなら一般の人間はもっとそうよ。」

「まあそうかもね。でも、知っておくべき知識っていうなら面と向かって説明して欲しかったわね。私がそんな生活の知恵にならないようなことをわざわざ調べるわけじゃない」

王様の非難の内容を逆に非難する勇者ユラ。ここまで勝手だと確かに大物臭も…しないか。

「いや、主婦じゃないんだから…。それに、あなたがこういうものに興味を持っていないのが意外なぐらいだけど？」

「まったく見当違いだわ。ひいひい言いながらあちこち駆け回って雑用をこなしてる私みたいな人間に、そんなものに首を突っ込む余裕なんてありません！」

「そう？まあそういうことしておきましょうか。」

両手を広げ顔を逸らすユラに、王様は柔らかな微笑を返した。

「ま、知らないそうなら機を見て話してあげるつもりだったわ。それが今。それだけのことでしょう？」

王様が薄く笑う。すつと細められた目の端に、どこか妖しさの漂うような笑みだった。

「ま、別にそこはいいわ。……それで？私に何をしろと？」

給仕に飲み干したティカップを返し、王様の方へ向き直る。

膝を組み、その上に拳を乗せたユラ。すつと背筋を伸ばしたその体から、ひやりと冷氣にも似た感覚が漂ってくる。はつきりどこがどう変わったとは指摘できないのだが、部屋に入ってから今までのとばけた姿とは、明らかに雰囲気違っていた。

強いて言うなら、眠そうな印象を与える眼のその瞳に、心の底を見透かすような鋭い光が加わったことだろうか。

「……そう身構えないでくれるかしら。大した事じゃないの。」

漂い始めた緊張感をあしらうように、王様は肩をすくませる。

二の句までに若干、ユラの目を見つめて間をおいた。それから薄く笑顔を浮かべて説明を始めた。

「ここに呼んだのは貴方から諸国の様子の報告を聞くためよ。この件はただのついで。そう。大した事じゃない。貴方には、とある他国に委託しているラストワードの管理状態を調査してほしいだけ。」

「調査？」

王様の言葉に間髪入れず、低く張りのある疑問の声をあげ、ユラは眉間に皺を寄せる。

そついうものに慣れない人間なら萎縮してしまいそんな懐疑の目が王様に向けられていた。

「貴方にしてはまたえらく悠長な話だ。馬鹿が夢を見るのに不足がないようなものが外に漏れたんだろ？露払いの間違いじゃないのか？」

「…もちろん、任務に支障をきたすものは排除していただくわ。けどまあ、何もなければ何もせずに経費で旅行を楽しんでくれていいのよ。」

その目を見て王様が苦笑いする。

「ものがものだから慎重にならざるを得ないのよ。……わかつてもらえるかしらね。狙われてる可能性があるのなら万全の上に万全を期したいわ。貴方への依頼はそういう意味よ。そこを理解しておいて欲しいところかしら？急を要する一大事なら、一人でも必要なだけ問題を解決できる人材なんて、……結局とても限られるの。」

王様の口許は笑ったままだが、瞳は笑うのをやめた。沈黙したユラにはその言葉に込められた真意までが伝わっている。

彼女は言外にこう言っている。お前はその限られた人材だ。死ぬのも逃げるのも許さない、と。

「いや、…待て。これは露払いどころじゃないな。貴方は……もしもの有事には私一人で戦えと言ってるのか？」

王様の付け足しに、ユラは確認するような口調で尋ねた。

「あら、今をときめく勇者殿には、そう難しい話じゃないでしょう？」

「……これは挑発されているのかな？…そんなはずもないだろうに。」

「王様のとぼけた回答に静かに抵抗するユラ。」

「露払いどころか、結局障害は全て叩いて潰という事だろう？私一人です！」

「……この件では他国にきちんとした形で兵士を送ったりできないのよ。あくまでも非公式に処理しないと、国家間の緊張を不用に高めてしまう…。これしかないの。任せたわ。見敵必殺ね」

上目づかいにユラを見つめたあと、額を抑えるユラに笑いかける。いい笑顔だ。

「私の辞書には不可能という言葉も、死という言葉もきちんと載っているのだけれどもね。赤線のアンダーラインつきでよく目印を

つけてある。」

「おお勇者、そのうち死んでしまうとは何事じゃ!？」

「……死の安息も許されないか？」

「……冗談よ。貴方はいつかきつと、充実した1日の終わりのように、安らかで楽しい眠りを迎えるのでしょうか。」

からかうような笑みはすぐに柔らかくなり、安心感のあるしつかりした声が紡がれる。こういう顔をしていると、彼女も確かに女王に相応しい気品を漂わせているのだが……。

やはり普段がひどい。

「でも、願わくばそれはもつとずっと先の事であつて欲しいし、そうでなくてはならないの。年寄りも若者より先に死ぬものよ」

ユラは王様の瞳をじつと見つめて、少しの沈黙の後、はあーっ……と長い溜め息をついた。

「お前の相手をするとなれるな……、本当に。」

ユラから放たれ続けていた威圧感が無くなり、体からは力みが抜ける。

「あ……ああ……。」

椅子に体を支えさせて全身から緊張を解いた。頭は天井を向き、手足はだらりと垂れ下がる。

例えるなら風呂上がり休憩のような力の抜けきつた態勢。……そのままユラは次の声をあげた。

「……言われなくともそのつもりよ。私は……、まだまだ生き足りない。………あんたがどうかは知らないけどね。」

「あら、私もまだまだ飽食を気取るつもりはないわよ……?」

ゆっくりと自分へ帰ってきたユラの視線に、王様はまさに非の打ち所のない完璧な笑いを浮かべた。

「何よそのいい笑顔。やれやれ……。どれだけ生きれば満足して成仏するんだか……。」

肩をすくめるユラ。いつの間にか、突き刺すような冷たい空気もどこかへやっていた。

「いいよ。…ま、行ってやるわ。バカンスがてら、あくまで調査にね。んで？勇者ユラをどこに連れ回してくれるのかしら？」

片目をつむったユラの表情は、おつかいを頼まれて『しょうがないわね』と答える少女にも似ていた。

「助かるわ。さすがみんなの勇者様ね。」

王様はほっと胸をなで下ろして、安堵の笑顔のままおつかい先を告げる。

「じゃあ早速ラストワードの管理状態の調査兼友好大使として、夜の国、“魔郷”ヴァンピールに行って来て頂戴。」

「……………」

沈黙のまま、みるみるうちにユラの表情が変化していく。

「……………まじでか…？」

それはまるで、おつかい先の肉屋が大嫌いな犬を飼っている店だった事を知ったときの、苦渋の少女のような顔だった。

「魔王殿直々のご指名よ」

その言葉がトドメとなったように、ユラはゆっくりと机に突っ伏した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3370w/>

勇者ROLLINGざワールド

2011年10月9日15時56分発行